

サケとアイヌ

内陸の漁村

上川盆地は面積約440km²を測る北海道では最大の盆地だ。ここに「川上の人びと」を意味するペニウシク、つまり上川アイヌが暮らしてきた。

19世紀代の上川アイヌは300人ほどだ。サケの遡上河川である石狩川と忠別川筋に居住したが、かれらは石狩川の上流域と下流域、忠別川筋の3つのグループに分かれていた。明治9年（1876）の開拓使の調査によれば、上川アイヌは3名の乙名（首長）に「分割支配」され、惣乙名（総首長）が全体を統括していたという。

文化4年（1807）の近藤重蔵^{*1}『石狩川川筋図』をみると、当時3つの地域にはそれぞれ1箇所ずつ和人の番屋（交易所）が置かれていた。そこで取引されたアイヌの産物は、おもにサケの干物（干鮭）と獣皮だ。弘化3年（1846）の記録では、獣皮は年間にキツネ800枚、カワウソ200枚、イタチ1,000枚などを出荷していた。この記録に洩れているが、ヒグマの皮も相当出荷していただろう。

干鮭については、明治5年（1872）の上川アイヌのサケ漁獲量は約9万尾にのぼった。戸口は68戸306人だから、遡上量が大きく減少していた当時でも、1戸あたり約1,300尾を捕っていたことになる。その多くは交易にまわされていたのだろう。

ただし松浦武四郎^{*2}は、MEMという集落では一人暮らしの老婆でさえ800尾のサケを捕り、1軒で飼う7匹程のイヌが川で捕ってくるサケだけでも2,000尾になると記している。イヌが捕らえるサケだけでも、明治5年の戸の漁獲量を上回る。他の地域では戸あたり10,000尾以上捕っていた例もあるから、上川でも古くは戸あたり5,000尾ほど水揚げしていたと考えておかしくない。その場合、戸数を70とすれば、上川アイヌ全体の漁獲量は35万尾になる。上川アイヌは内陸の漁民であり、その集落は漁村といえるものだったのだ。

※1 近藤重蔵

[1771-1829]江戸後期の幕臣。北方探検家。寛政10(1798)年、松前蝦夷(えぞ)地御用役として蝦夷地を探検し、択捉(えとろふ)に「大日本恵土呂府」の木標を建てた。北海道各地の事情を明らかにするとともに、北方警備について建築した。

※2 松浦武四郎

[1818-1888]江戸末期の探検家。蝦夷地に関心を持ち、しばしば訪れて多数の紀行文や地図を残した。



水の都

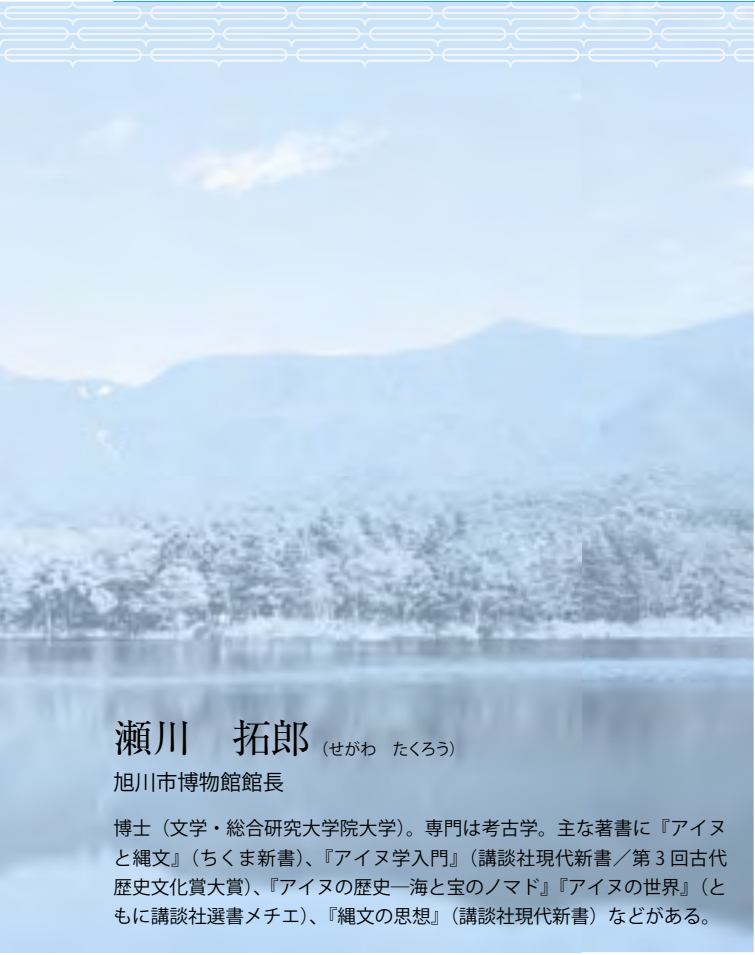
武四郎によれば、飢饉^{ききん}のおりには天塩・十勝・湧別・渚滑など各地のアイヌが山越えし、上川盆地のサケで飢えをしのいだという。話半分としても、上川盆地が突出したサケの産卵場地帯であったことを伝えるものだ。第二次大戦後もしばらくは、水たまりや側溝まで上ってくるサケがこの地の風物詩となっていた。

遡上してきたサケは、石狩川と忠別川筋の湧水で産卵したが、このような産卵場の泉池をアイヌはMEMと呼んだ。上川アイヌの集落は、遡上するサケの背中が半分みえるような、MEMを水源とする浅い小川のそばにあった、と武四郎は伝える。

調べてみると、MEM地名は標高100~110mの限られた地域に分布している。それは上川盆地の平野面を構成する石狩川扇状地と忠別川扇状地の、扇端湧水帯と関連していた。豊富な地下水を蓄えた扇状地は、扇端に泉池をつくって地下水を湧出する。そのため扇端湧水帯にMEMが集中していたのだ。

※3 氾濫原

河川の氾濫や河道の移動によってできた平野。河川の堆積物によってつくり、洪水時には浸水する。



瀬川 拓郎 (せがわ たくろう)

旭川市博物館館長

博士（文学・総合研究大学院大学）。専門は考古学。主な著書に『アイヌと縄文』（ちくま新書）、『アイヌ学入門』（講談社現代新書／第3回古代歴史文化賞大賞）、『アイヌの歴史—海と宝のノマド』『アイヌの世界』（ともに講談社選書メチエ）、『縄文の思想』（講談社現代新書）などがある。

かつては札幌の市街地も、上川盆地とならぶ石狩川水系のサケの一大産卵場であった。札幌のアイヌも、上川アイヌと同様メムで活発なサケ漁をおこなっていた。このメムは、知事公館・植物園・サッポロビール工場などに列をなして点在するが、このラインも豊平川扇状地の扇端湧水帯にあたる。

豊富な湧水に恵まれ、そのため多くのサケが群れた上川盆地と札幌市街地は、サケの都であり、水の都であったといえよう。

氾濫原^{*3}に生きる

上川の場合、メムが立地したのは川に近いもっとも低い段丘面だ。この段丘面は、河川改修以前の明治・大正期には洪水のたびに冠水し、巨木に乏しく、草地と湿地が広がっていた。そのため開拓期にはこの低位段丘面は放置され、市街地・屯田兵村・第七師団^{*4}など和人の開発は、洪水が及ばない一段高い段丘面でおこなわれた。上川アイヌは、毎年のように繰り返され

※4 屯田兵村・第七師団

明治政府が北海道の開拓・警備と失業氏族の救済の目的で設置した農兵。明治8（1875）年～明治32（1899）年にわたって道内各地に37の兵村が置かれ、北海道開拓に重要な役割を果たした。

明治23（1890）年、上川郡に初めて旭川村、永山村、神居村が置かれ、明治24（1891）年、屯田兵が入植し、明治34（1901）年、札幌から第七師団（旧日本帝国陸軍）が移駐した。

る洪水の被害を覚悟で、和人からみれば劣悪な環境の低位段丘面に集落を構えていたのだ。

ただしアイヌの祖先は、はるかな昔から内陸の漁民として洪水地帯で暮らしてきたわけではない。

上川盆地の縄文時代の遺跡をみると、低位段丘面に位置するものはほとんどない。そもそも縄文時代の遺跡の立地は、サケの遡上河川や産卵場の分布とまったくかかわらない。上川アイヌの暮らしに丸木舟は不可欠だったが、縄文時代の遺跡は川から離れた丘陵付近にあり、日常的に丸木舟を用いることもなかったようだ。縄文人は漁民ではなく狩猟民であり、川の民ではなく森の民だったのだ。

この転換は、擦文時代中頃の10世紀前後に生じたものであり、そこには本州とのサケの交易が深くかかわっていた、と私は考えている。

アイヌの山野河海

特定種の産物が商品化し、その捕獲に特化していくのは、農耕民と交換をおこなうようになった世界各地の狩猟民がたどった道でもある。

そのことによって狩猟民と農耕民は共存し、たがいに豊かな暮らしを築いてきた。たとえばアイヌが出荷した干鮭は、中世の日本ではその粉末が刀傷や女性の血の道を整える妙薬として利用され、江戸時代には庶民の食卓だけでなく、高級料理の食材にもなって生活を彩った。

海・山・川・湿原・島で繰り広げられたアイヌの営みは、日本の社会とまったくかかわりがないようにみえる。しかしこの連載で紹介してきたように、かれらと山野河海のまじわりは、日本と濃密に結びついていた。アイヌの歴史は日本の歴史の鏡であり、アイヌは私たちの鏡でもある。

そのアイヌについて、そしてかれらと日本を支えてきた北海道の山野河海について、私たちはいったい何を知っているだろうか。

※「山野河海のアイヌ史」は今回をもって終了します。